

# 共に歩む市民の会

たまり場広報委員会

## 会報

第8号

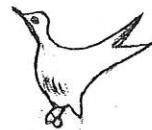
西241-0005

横浜市旭区白根3-2-5

045-953-6727

2000年11月 1日発行

### カムバツク



川田 剛

\* 帰子川にカモがいない時、なんと呼べばよいか？・・・もちろん、カモン！

\* 飛び立つ時期が近づきカモクになったカモが言うコトバは？・・・『アイ・シャル・カモバック！』

\* では、出発前のコーヒーは？・・・やっぱり、モカに限る。

以上、全部できた人は連絡ください。“カモ南ばん”をごちそうしますので。

……で、今日の話は「カモじやなく、カム」です。Y夫さんです。Y夫さんが2年半ぶりに市外の病院から帰って来ます。もうじき、近くに……。

彼のデビューは8年前、全く鮮やかだった。直接自分で問い合わせてきた翌日に一人で見学に来て、その日のうちにもうすっかり作業所のメンバーの一員になっていた。積極的な人だと思った。

彼はユーモアの人もある。キャンプファイアーの火のまわりで彼が演じたラッコ踊は圧巻だった。彼の後ろに続いて踊りながら、皆で腹のよじれるほど笑ったっけ。

たまり場づくりの話し合い。輪の中に必ず彼の姿があった。「のるかそるか」という話になった頃、彼は『自分でお金を出してでもやりたい』と言った。このひと言が居合わせた人たちの気持ちをずいぶんブッシュしたのじゃないか。

ある冬の夕方、彼と「おいしい日本酒を飲みに」横浜へ行ったことがある。飲みながらいろいろ話した。駅で別れる時、だいぶ酔いの回っていた私が「明日起きられるかなあ」とつぶやいた。その時彼が言った言葉をよく覚えている。「ボクは明日の朝8時前に○○さんと△△さんにモーニングコールをかけます。………そのために生きているようなもんですから」。しんみりとした口調だった。私はなんとコトバを返してよいかわからなかった。そして思った。助け合ってそういうことなのか、と。

「旭区の関係者の“顔の見える関係”が日常的なものになる」「当事者（メンバー）の元気パワーの発揮につながる」のなら…と、たまり場を始める時考えた。一人ひとりのちからが集まって一定の成果があがっていると思う。さらに、「木々の会」による夕食会の活動や電話相談ボランティアの登場によって、役者の巾が広がってきた。これからは、病院だとか作業所だとかの「箱」単位ではなく、人びとが暮らしている生活の場所そのものが舞台となっていくに違いない。他ではないこの場所でいま生きていることをいつくしみ合う…お互いでありたい。これから何が生まれていくか楽しみだ。

退院後のY夫さんのホームグラウンドとなるアパート探し始まった。路地を入っていくと、エッと思うような所に木々に囲まれた祠（ほこら）があつたり、石段が切り立っていたり、見事に花が咲いていたりする。たまり場に近い所にいい物件が見つかるとよいカモ…ね。

## KANAGAWA D.C. 一神奈川病院デイケアの紹介一

神奈川病院 福原一彦

川井本町の丘の上に神奈川病院デイケアはある。三ツ境からバスで来る仲間は坂を昇ってくる。16号経由で来る仲間は階段を昇ってくる。毎日60名くらいのメンバーが歩いて、バイクに乗って、通ってくる。さまざまな世代の方がさまざまな想いを持って通ってくる。

さて気になるプログラムは、陶芸、スポーツ、パソコン、英会話、料理…という具合に盛りだくさん。では一週間のプログラムを紹介しましょう。

	午 前	午 後
月曜	メンバーミーティング（第2,4週は個人面接）	スポーツ・パソコン（第2,4は英会話）
火曜	書道・就労クラブ（月2回）	SST（生活技能訓練）・ビデオ鑑賞
水曜	キッチン・瓦版	自主活動・エアロビクス（第2,4）
木曜	陶芸・朗読（最終木曜はステップアップ活動）	サイコドラマ・ニュースと私・ソフトボール
金曜	七宝焼（第2,4は手芸）・絵画・スポーツ	音楽・週替わりプログラム
土曜	土曜クラブ	土曜クラブ

真面目な話。神奈川病院デイケアは、この地域で暮らし精神科を利用している方が規則正しい生活を維持するために、日中を過ごす活動の場を提供しています。グループで行うプログラムに参加することによって、対人関係を広げたり、物事への集中力を高めたり、規則正しい生活リズムを身につけ、健康的な社会生活を送ることを目指しています。

ではどういう方がデイケアを利用しているかというと。退院後の生活リズムを身につけていたい方。対人関係などに自信が持てない方。基本的な生活習慣を身につけ、社会性を向上させたい方。社会的自立への自信をつけたい方。就労を目指しているが、まだ自信のない方。などなどです。実際には、皆さんその人なりにデイケアを利用しているようです。

デイケアの自動ドアを通り抜けると、右へ行くとスタッフルームあって、3名の看護婦と3名のケースワーカーと作業療法士が1名います。女性が5名と男性が2名。左へ行くとロビーがあって、長椅子ではおしゃべりをしたりタバコを吸ったりしている人たちがいます。さらに長い廊下が続いて、右手のドアは多目的ホール。ここは毎日のミーティングで皆が集まる部屋です。普段はゲームをしたりピアノを弾いたり。昼食時には食堂となって満員御礼。廊下の左手には部屋が5つあり、それぞれ絵画、陶芸、七宝焼、書道のプログラムのときに使われています。個人面接もこれらの部屋で行われています。一番奥の部屋は和室で、ここはメンバーが靴を脱いでくつろげる部屋になっています。男性使用時間と女性使用時間に分かれて利用されています。このほかに男女別のロッカールームとシャワー室、もちろんトイレもあり、ロッカーは一人につづつあるぞ。

こんな神奈川病院デイケアには、今日も個性的なメンバーが、さまざまな目的を持って通ってくる。スポーツを楽しむために、スタッフに相談をするために、体力をつけるために。仕事につく準備をするために。悩みを仲間同士で話し合うために。家にこもりがちなのを避るために、また安らぐために、時には暇つぶし？のために。などなど。皆、KANAGAWA D.C.で新しい経験をしているのではないでしょうか。

# 不思議な縁と

沖柳 明彦

## そよかじ

五月の鯉のぼりが風に揺れる頃、僕は福島県にきていた。美しい田園に桜の花が見える。ささやかな旅のスタートだ。

きっかけは、友だちが僕にくれた手作りの「素よ風」という個人通信だった。沖縄風に「そよかじ」と読むのが正しいらしい。これを発行したS君は旅と自然をこよなく愛し、本当の豊かさと充足を求め、農に取り組むようになる。これを読んだときには、大いに共感すると同時に、その思い切りのいい行動力をうらやましく思った。

そんな魅力的な私信をくれた友だちが「福島のS君のところに一緒にいかないか?」と誘ってくれた。

折しも世間はゴールデンウィーク。道路はどこもひどい渋滞だった。僕は、彼の大学時代の仲間が運転する車に便乗させてもらった。車の中で流れる音楽は、グランジとかオルタナティブと呼ばれるロック中心だった。そのなかで一番耳に残ったアーティストがニルヴァーナだった。このバンドの中心人物のカート・コバーンはすでにこの世にはいない。僕より少し若い世代の彼らにとってカート・コバーンは特別な存在らしかった。

福島に着くとS君が待っていた。日に焼けた顔に凜とした目が印象的な青年だ。ここでの食事は土地で収穫されたものが中心の、素朴で滋味ゆたかなものだった。自分たちが薪で焚いた風呂に入った。上げ膳据え膳ではなく、できることをそれぞれ分担して手伝った。気持ちのいい人たちと知りあえて、本当に心温まる旅だった。

## 棟梁 西岡 常一

建築に興味をもっていた頃、ふとしたきっかけで宮大工の西岡常一の本を読んだ。日本の伝統的な木造建築技術は世界に誇れるものだという感をもった。西岡氏は職人修養の始めに農業を学んだ。木の癖や扱い方を理解するには、農を勉強し、自然と密接にかかわることが必要だったという。こうした経験を経て職人となった彼は仕事にあたるとき 500年、1000年後の建物のすがたを見据えて作るのだそうだ。やがてできあがった寺は

法隆寺がそうだったように、きっと1000年以上の風雪に耐え、のこるだろう。飛鳥の時代より受け継がれた木を生かす技、すなわち自然をいかすという技にまつわる話は僕に大きな影響を与えた。

## のこ 遺さないという考え方

ある時、写真家の星野道夫の展覧会が催されていた。アラスカを撮ったものが中心で、心ひかれる作品が数々あった。また写真に添えられた彼自身によるコメントも写真に負けず劣らず心に響いた。とりわけ先住民のスナップ（イヌイットだったと思う）の下には「彼らは何も残さない代わりに、自然を残した」文章を正確に憶えていないが、そんな意味の言葉が書いてあった。

数々の文明が成熟すると、その榮華と威光を誇示するかのように巨大な建造物を造った。それと引き換えに自然は壊滅的なダメージを受けた。

しかし、イヌイットの人々の暮らしは、与えられた自然を守り、幾世代にも引き継いだものだった。きっと、このことはとても大切なことを問いかけているのかもしれない。「知恵の結晶のような建築物を遺す」ということは意味のあることかもしれないが「そのままの自然を残す」ことは、それとは全く意味の違う、大切なことのように思えた。そんな風にして、いつの間にかアラスカという種が僕に蒔かれたのだという気がする。

## 未生に御手あり

(この一輪に、会いに来し)

アラスカへ渡航する手配を終えると押田神父に会うために、信州にある高森草庵へ向かった。道中、数年前から体調をくずされたという彼のこと気がかりだった。

何年も前に押田神父が東京で講演をした。親友に誘われて聞きに行くと彼が現代の危機の根源について話していた。とってもカッコいい不思議なジイ様だった。

自分が通っていた教会の牧師の説教は、いつも頭を通りすぎていったが、押田神父の語る言葉は長いこと心から離れなかった。

彼は今から40年ほど前に頭でこね回すばかりの観念ことばの神学が虚しいと、制度的で法律的な

修道生活から離れて座禅を始め、信州に修道と農の場をひらいた。

僕がお世話になった時はちょうど田植えの季節だった。素足に泥が気持ち良く、水田には小宇宙さながら無数の小さな生き物がうごめいていた。

農薬や化学肥料とは無縁の土地での生命の多様性。そんななかで機械を使わない、手作業による稻を植えることを体験させていただく貴重なひとときだった。作業を終えると、腰のあたりが激しく痛んだが、遠くの山々に目を運ぶと何ともいえず清々しい気持ちになった。

茅葺き屋根の葺き替えが一段落して、田植えも終わると心尽くしの宴がもたれ、梅酒がふるまわれた。誰もが食べて飲み、笑顔がこぼれる素晴らしい時間だった。そして離れがたいその会が終わるころ、草庵の人たちと別れの挨拶を交わした。

別れぎわにシスターからプレゼントを頂いた。共働学舎を営む宮嶋眞一朗氏の講話がまとめられた『こころの道しるべ』という本だった。

そこへは、いつか行ってみたいと話したことをシスターはしっかり心に留めていてくれたのだ。

この大切な宝物をバックパックにしまい草庵をあとにした。

かえるの大合唱が夜の闇にひびくなか、心も軽やかに、ズンズンと大股で駅をめざした。静養中だった押田神父には会えなかったものの、草庵のどこ彼処にも、彼の存在が確かに息づいていた。

「生きていらっしゃるんだ、いつか会えるかもしれない」と思うと僕はそれだけで満足だった。

## クリンギット族の薬草

アラスカに行く目的の一つに南東アラスカに住むクリンギット族に古くから伝わる薬草の話を聞くということがあった。星野道夫の文章が僕を強く引きつけた。

「あと数か月の命とガンの宣告をされ、五年を経た今でも生きているクリンギット族の老女と会ったことがある。医者は奇跡だと言って不思議がったというが、彼女は隠れて飲み続けたデビルスク

ラブのことはついに話さなかった。子どもの頃から教えられてきたのだ。大切なことは絶対に白人に話してはならないと……。宗教も、言語も、白人文化との接触のなかでいつしか取り上げられてきたからだろう。」（星野道夫 著『森と氷河と鯨』世界文化社 90, 91頁）

読んだときに「これだ！」というインパクトがあった。知り合いにガンの人がいた。せっかくアラスカまで行くのなら、この薬草を調べに行こうとひらめいたのだ。

デビルスクラブの日本名はハリブキ。ウコギ科の小低木で日本では、薬草としても紹介されている。果実は利尿効果があり、根は解熱作用があるという。（伊澤一男『薬草採取』主婦の友社）

わざわざアラスカまで行かずとも国内で手に入る。ただし星野氏の本には、詳細が書かれていないため、加工の方法や飲み方については実際に現地へ行って、この草の知識のある人を探す必要があった。星野氏は、旅で知り合った大切な友人のプライバシーや文化を尊重するために、作為的に細かい部分を書き込まなかったのではないだろうかという気がしている。

とは言うものの、ここまでに絞り込めたのは、まぎれもなく星野氏の文章のおかげである。

ただこの時点で、知り合いが薬草を飲んでくれるかということはわからなかった。それでも、もしこれを飲んでもらえたたらという気持ちで動いていた。

シアトルからシトカに向かう途中、飛行機の乗り換えてケチカンという小さな町に立ちよった。

僕は憧れの地を踏めるということで少なからず興奮していた。

空港の外で一服していると、一人のアメリカンインディアンらしき人が話しかけてきた。

簡単な挨拶を交わすと、何をしにシトカへいくんだ？と聞かれた。「インディアンに伝わる薬草を学ぶために」と答えると「俺の息子はガンなんだ」と話しあじめた。ケチカンに薬草を使ってガンを癒す人がいるという。ひょっとしたらと思ふ「その薬草とはデビルスクラブですか？」と聞くと、そのとおりだと彼は言った。「息子は骨と血液に異常が見つかり、ガンだとわかった。病気になってから3年ほど経つがデビルスクラブを処方してもらい今は良好だ」とその専門家の電話番号を僕の手帳に記すと、さらに彼自身の住所とEメール・アドレスを僕に教え、彼は「またな」といって立ち去った。アラスカで初めてあった人から薬草の話を聞けるとは夢にも思っていなかったので、かなり動搖したが、その第一歩に力強い手応えを感じた。不思議な出会いに感謝をしつつ、僕は再び機上の人となった。

シトカに着いたのは夕方だった。ここに来るのは生まれて初めてのはずなのに、なぜかホッとする。都市とは違うおおらかな時が流れているからだろうという気がしたが、もしかするとそれだけではないかもしれない。

この町に一件だけクリンギットインディアンが営む民宿があり、ここにすれば薬草のことを知る人とコンタクトできるだろうと、およその見当をつけていた。しばらくはここに泊まって情報を集めることにした。

部屋に荷物を置くと、宿の人から夕食に招待され、オーナーの釣り上げたキングサーモンが食卓に出された。それまでシアトルでは僕約していたので口くな食事をとっていなかった。まさしく夢のようなディナーだった。

この日はオーナーの娘が家族を連れて遊びにきていた。彼女は「友達がデビルスクラブのことをよく知っているから後日紹介してあげる」と約束してくれた。ただし喜んだのも束の間、その友人は何年か前にこの地を離れたことが分かった。しかしこのこと以外にも、僕がシトカに滞在する間彼女は忙しい時間を割いては、森で多種多様な薬草について教えてくれたり、自然食の店で製品となった薬草を見せてくるなど、何かと心を碎いてくれた。きっと彼女のなかに、引き合わせられなかつた友達に代わってという気持ちがあったのかも知れない。

夕食後にここで働くヘンリエッタに「コンサートに行かない？」と誘われた。本当は、かなり疲れていて気が進まなかったが、少し迷ってから出かけることにした。ところがこれが本当にいいクラシックのコンサートだった。驚いたのはステージの背後が総ガラス張りで、シトカの海と霧に煙る山々のパノラマが演奏者の後ろに見えるという見事なしきけだった。

この季節のアラスカは、夜の10時頃まで日が沈まないので、ほぼコンサートが終わるまで美しい景色が楽しめた。そのあとのティー・パーティーではヘンリエッタは片っ端から彼女の友人に僕を紹介していく。彼女の顔の広さには感嘆してしまう。さらにすごかったのは、日曜日に教会へ連れていってもらったときだった。彼女の怒濤の紹介のおかげでシトカに多数の顔見知りができた。

初老に近い彼女はかつて教師をしていたというが、英語能力の低い僕にとっては、時にスピーク

スマントして代弁してくれたり、一流ホテルのコンシェルジュのようにかゆい所へ手の届く、世話人兼相談役だった。見知らぬ初めての土地で、彼女の存在はどれほど心強かったか言葉に尽くせないものがある。

だんだんとこの町になれてくると、あることが気になり始めた。どうも大きく分けて、二つ集団があるように思えるのだ。ひとつは白人が中心に構成される一群。そして少数派のクリンギット族が主流の一群だ。ハッキリとではないが漠然と棲み分けがあることを感じた。それはこの町に数多くある教会の出席者のかたより方で実感した。できることなら後者の社会に近づきたかった。

やがてある一家と親しくなることでクリンギットの人々の集いに入ることが許された。息子のハロルドは一見するとアイヌの人に雰囲気がしている。彼は日本語が話せて、第二次世界大戦で使用された日本の戦艦の名前を数多く記憶している。

知り合った時はそれが不思議だったが、父のマルコが戦争体験を僕に語ったときに「アメリカの戦艦よりも日本の船のほうが断然美しかった」といった。その影響をハロルドは受け継いで、戦艦好きになったのではないかと思った。

母のアデレードは物静かだが、いつも口もとに温かい笑みを浮かべていたのが印象的だった。日曜日のたびに夫婦揃って二つ以上の教会の礼拝に出席するするのだ。

ある時、彼らといっしょに礼拝に行った。二つ目に行った教会では、出席者の大多数がクリンギットの人たちだった。終わりにそれぞれが手をつなぎ合わせ、輪を作りて祈りを捧げた。そのなかで、マルコが真剣に僕のことを祈ってくれた。それには、ふいにこみ上げてくるものがあった。

## ボブ その無償の行為

いちばん会うことが望まれた人物、ボブとの約束の日がやって来た。クリンギット族インディアンの彼は「死人の世話」をしている。10年以上、誰に頼まれた訳でもなく、彼一人でこの町のロシア人墓地の手入れをしているのだ。また、その昔ここはクリンギット族の魂が葬られた場所でもあった。僕はここにいる間、何度もそこへ足を運んだ。深い森のあちこちに墓石があるのだが、不思議な温もりがあり心が落ちつく特別なところだった。

森の草を刈り、掘り返されて散らばった骨や品物を元の場所へもどしていく。そんなボブの地道な活動はいつしか、この町の人々に民族のアイデンティティへ目を向けさせることになり、やがて大きな変化をもたらした。

かつてこの墓地の場所に、住宅建設の計画が進められていた。しかしそこにボブの行動が波紋を呼び、町のなかで大きな議論となり、やがて建設の計画は中止された。

さらに、今ではアラスカ全土に広がる潮流となった「リペイトリエイション」という運動にも彼は貢献している。これは各地より持ち去られた民族の大切な遺品を取り返そうというもの。博物館や収集家の手に渡った品が、もとの先祖の土地にあることが当然だ、という主張なのだが、実際に学術的に貴重な発掘物を確保したい研究者と、祖先の魂の尊厳を守りたいというアメリカン・インディアンの価値観に大きな落差がある。

歴史の中で、数々の大切なものを奪われてきたアメリカン・インディアン。近年、シトカのクリンギットの人々に起きた伝統的な文化への回帰とこの運動は、どうやら無関係ではないらしい。大切な自分たちのスピリットを取り戻しつつある彼らは今、再生しようとしている。

ボブに薬草の教えを請うときに、英語に自信のない僕は質問を紙に英文で書き、それに作り方を書いてくれるように頼んだ。ボブは一読しただけでそれを僕につき返した。「俺は忙しいんだ」とぶっきらぼうに言ったあと、それっきり何も喋らなくなってしまった。

どれほどか無言の時が流れ、次の言葉も浮かんでこないまま諦めかけたときに、彼が立ち上がって「ついてこい」と近くの森へと歩きはじめた。

途中、振り返ったボブは半ばあきれたように笑い「オマエはいい仕事をしたな」とつぶやいた。「飲ませてあげたい人のことを想いながら、これを作るんだ。心の中で祈るようにな」と探ってきたデビルスクラブを加工するやり方を目の前で見せてくれた。もしかするとクリンギット族の宝物のように大切な伝承を文章だけで教えることなど彼には考えられなかったのかも知れない。

「これはマジックではない。ただ、生きるエネルギーを強めてくれるんだ」デビルスクラブが魔法のように効くものではないと語った。

ひととおり終わる頃には、顔や手のいたる所が虫に刺されていてひどくかゆかった。そして彼の家の中に招かれ、ボブはかゆみ止めを分けてくれた。突然「オマエの宗教は?」と聞かれた。

「俺は天河社を信じている。なぜなら、クリンギットの神と同じだからだ」古事記や日本書紀の世界創造とクリンギットに伝わる神話がとても似ているという話は聞いたことがある。でも実際に彼の口からそういう話を聞くと、一見生きる世界が違うように見える存在の彼に対して、不思議な親近感が沸いてくる。

「日本の北の方面にやまいを癒すことのできる女性がいるから、映画ガイアシンフォニー第二番を見るといい」と『森のイスキア』の佐藤初女さんのことを教えてくれた。「煙草はやめろ。オマエがガンになるぞ」と注意をされたが、少し彼と親しくなれた気がして、実はうれしかった。そんなボブに心からお礼を言って別れた。

宿に帰って今までの緊張がとれると、あとには体に重量感のある疲れがあった。

帰国すると、今度は日本のハリブキ探し始まった。アラスカでは容易に手に入るこの薬草も、日本では、デリケートな自然環境にある高山植物なので、必要以上に取らないことを肝に銘じなくてはいけないと思っている。今のところ絶滅種や絶滅危惧種の指定はされていないが、乱獲をすれば、あっという間にレッドデータブックの仲間入りとなる可能性がある。

困難にぶつかり投げ出しそうになると、友人や知人の援護射撃があった。インターネット検索してこの植物を探してくれたり、この文章へ多くのご教示を頂いた。それは心強いと同時に、本当にありがたかった。まだ見つけてはいないが、近いうち見つけられそうな気がしている。

いつかもし、この薬草の知識を必要としている人がいるならば、今度は僕が協力できるかも知れない。

次は青森の『森のイスキア』を訪ねたいと思っている。それでこの旅のゴールが見えるような気がしている。

(了。2000年7月)

## 「共に歩む市民の会」総会報告

共に歩む市民の会 沢田 雅子

6月24日に「共に歩む市民の会」2000年度定期総会があさひ保健所4号会議室で行われました。議長に福島国雄さん（あけぼの会）、書記には沢田（旭保健所）が選出され、議事は滞りなく承認されました。今回は「たすけあい・あさひ」や瀬谷区の「ひだまり」の方が参加される等日頃の活動の拡がりが伺えました。

昨年度は「市長とのふれあいトーク」や“やどかりの里”との交流セミナー等新たな取り組みがなされました。9月から準備を重ねてきた電話相談も「語らい電話」として平成12年5月からスタートし、少しづつ利用者を広げています。また、従来からの夕食会も好評で、毎週開催されることになりました。

総会終了後は「たまり場」にて交流会が開かれ、なごやかなひとときを過ごしました。「たまり場」を更に利用しやすくするために利用料の回数券導入等のアイデアも出され、今後更なる活動の発展が期待できそうです。

### 「たまり場」利用状況

開所日数	(うち夕食会)	延べ人数
5月 11日	2回	84人
6月 14日	4回	127人
7月 18日	2回	114人
8月 13日	2回	146人
9月 17日	3回	159人
合計 73日	13回	630人

### とある日の「たまり場」より

- ☆5/6 (土) 14:00~17:00 久しぶりの当番だったけど変わりは無かった。ホットタメ息がつけた。  
終わりです！ 岩渕 勝昭
- ◇5/17 (水) 16:00~18:00 (TEL話し) 語らい電話が始まってかつきが出てきた。 深井 浩治
- ☆6/14 (水) 16:00~18:00 今日は雨が降っているせいか、たまり場の当番よりも利用者が少ない。  
足立 文夫
- ◇7/27 (木) PM8:30 玄関スポット仮設しました。明日(金)からお使い下さい。 沖柳(父)
- ☆8/30 (水) 13:00~16:00 一人でいると寂しいです。誰でも来てくれるとうれしいです。ちょっと不安でした。 荒井 恵子
- ◇8/30 (水) 18:00~20:00 椅子に座り、タバコを吸いながら虫の泣き声がとても涼しかった！  
伊藤 茂

## ◎ 6/30 (金) 川島康博さん追悼会

去る5月、交通事故で亡くなられた川島さんの追悼会を沖柳さん(父)の発案で夕食会の前に行いました。開所以来38回も「たまり場」を利用された常連さんでした。口コミで15名の方が集まれ、物静かな中にも電車や施設の情報等の話になると驚くほど詳しかった彼の一面や思い出を、一人一人語り、在りし日の彼を偲び「夏の思い出」を合唱して終わりました。キーボードを持ち込み、数々のBGMや合唱の伴奏を心をこめて演奏して下さった猪方真子さん。ありがとうございました。(文責 吉田)

## ◎ 8/8 (金) 16:00~ 納涼会

沢山の人が集まってくれてありがとうございます。

16時を少し回ってしまいましたが、何とか料理もできて皆さん一杯(いっぱい)食べていただきました。お腹も満足したと思います。花火も今年は小さいやつですが一人、二人はじめると、やはり皆懐かしいのでしょうか、ほとんどの人がやっていたような気がします。タヌキも顔を見せてくれて、皆から食べ物をもらっていました。また来年もできるか分かりませんが頑張ってやっていこうと思います。

みなさんありがとうございました! (参加者 16名)

(志田 信司)

## ◎ 9/29 (金) お月見夕食会とミニコンサート

「たまり場」恒例となったこのイベント。今年も伊達和子さんの豪華な「お月見弁当」に舌鼓を打ち、佐藤葉子さん(ヴァイオリン)、宮地博美さん(チェロ)の演奏に聞き惚れました。美味しい匂いにつられてか、美しい音色に魅き寄せられてか、住み込みの「たぬき」も登場。志田さんと中村さんの食事療法が効を奏し、すっかり毛並みの整った姿を披露してくれました。新しいメンバーの方や保土ヶ谷区の家族会の方々も参加して下さり、まずは心豊かな秋の宵でした。

(木々の会 吉田)

### 編 集 後 記

☆いつまで続くかと思われたこの夏の暑さでしたが、確実に季節は巡り、10月ともなれば虫の音、ススキ、月の光、そして栗、マツタケ、りんご…と味覚の数々、そして毎週の夕食会。そうっ!たまり場は食欲を満たす所なのですね。胃をもって!感じます。

吉田和子

☆広報に頼もししい仲間が加わりました。21世紀に向け益々パワーアップを図っていきたいと思います。今日噂のタヌキと初対面。想像以上の愛くるしさに思わず感激。そうっ!たまり場は動物達にとっても安らげる所なのですね。見をもって!感じます。

松迫敦子

☆初登場です。神奈川病院にお世話になるようになって早くも半年が経ちました。たまり場には夕食会、語らい電話、幹事会でお邪魔していますが、なんだかいつもタバコを吸っていることが多いような気がします。そうっ!たまり場はくつろげる所なのですね。身をもって!感じます。

福原一彦